

第3章「言語活動の充実」の内容 7

言語活動としての「まとめ・発表」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37100

言語活動としての 「まとめ・発表」

金沢大学准教授 折川 司

Q 言語活動として「まとめ・発表」を、実際の授業の中でどのように行ったらよいか、各教科等の実態に即して、具体的に示してください。

各教科等にすでに位置付いている 「まとめ・発表」の言語活動に目を向けてみる

今回改訂された学習指導要領では、学習活動の基盤としての言語能力の育成が非常に重視されており、国語科以外の各教科等においても言語活動の充実が求められている。従来は、国語科の対象としてある意味、限定的に位置づけられてきた言語活動を他教科等の学習においても充実させ、子どもたちの言葉の力を学校生活のさまざまな場面で高めていかなければならない。

教師の中には「また新たなことを押しつけられるのか」という不安や不満を抱く方がいるかもしれない。しかし、言葉は国語科学習以外においても当然のことながら使用されている。思考したり、記録したり、他者とコミュニケーションをとったりすることが、各教科等の目標を達成するための重要な要素となっているということに疑問を差し挟む余地はない。言語活動とは、すでに各教科等の学習

の中にしっかりと位置付き、実践されているものなのである。

つまり、これから国語科以外のカリキュラムにも「言語活動」というものを新たに設けませんかということではなく、カリキュラム上にすでに存在している（しかし各教科等の特性上、現状では十分に機能しているとはいえない）多様な言語活動に改めて目を向け、意識の変革と指導の工夫によって充実させてみましょうということである。

ここで問われている「まとめ・発表」の場は、中央教育審議会の答申に例示されている家庭科、技術・家庭科、特別活動、総合的な学習の時間においても、またそれ以外の教科等においても数多く用意されている。それはたとえば、課題解決に向けて調査したことや学校生活の改善に向けて取り組んでみたことなどをまとめ、提示し、他者と分かち合っていくような学習展開であり、そうした活動の中に言語運用の機会は頻繁に出現している。

問題は、そうした言語活動をどのように充実させるかという点である。

各教科等に位置付いている「まとめ・発表」と 充実させるための視点

(1) 「まとめ」：言葉によって思考を整理する

「まとめ」とは、それ自体単独でも成り立つ言語活動であるが、「体験したことや調べたことをまとめ、発表し合う」という答申の文意をふまえると、「発表し合う」という要素とセットにして考えるのが適当であろう。つまり、ここで言う「まとめ」は「発表し合う」ために行われるという位置づけであり、そうした「まとめ」の活動をイメージするとよい。

総合的な学習の時間や社会科、理科においては、発表に向けて調べたことや考えたことをまとめる機会は多い。食料の生産・流通や理想の街づくりなどについて調べたことを模造紙に整理したり（小学校社会科）、昆虫の生態について調べたことや分かったことをノートに記述したり（小学校理科）する「まとめ」の活動は比較的よく行われている。家庭科においても、地域の人々と深く関わるために実践したことやその過程で分かったことなどを整理したり（小学校）、世界の人々の服飾文化について調べたことや幼児との交流体験の中で学んだことをまとめたり（中学校）する活動は数多く報告されている。また、磁石を用いた玩具（小学校理科）やナップザック（小学校家庭科）などの製作体験について、順を追って記録したり、製作したものの魅力や製作時の苦労を書き出したりすることも「まとめ」の言語活動の一つである。実に多様な「まとめ」が現在すでに行われている。

しかし、先述したように、多くの場合は言

葉に対する意識が教師・子ども共に希薄であり、「まとめ」の言語活動が行われる頻度とその充実度は残念ながら比例していない。ナップザックを製作する過程を「裁った」「ぬった」「難しかった」という一言で終わらせ、野菜の産地調べ、輸送状況調べを「ピーマン・宮崎、トラックとフェリー」のように極端に単純化する。言語使用に関するこうした状況とその許容は、国語科以外の教科においてはけっして珍しいものではない。それは、家庭科では手縫いによる製作ができたかどうか、また社会科では食料生産物の分布や輸送状況の理解こそが重要であって、言葉による諸活動の認知についてはさほど問題にされてこなかったからである。これからは、そうした「まとめ」の活動を「言語活動」として認識し、子どもたち一人ひとりに適切かつ効果的な言語運用を求めていかなければならない。

しかし、子どもたちの「まとめ」に曖昧な表現や未熟な箇所があった場合、それを教師が安易に酌み取ってあげたり、逆に、修正を強制したりすることは望ましいとはいえない。「ここがよく分からない」という指摘とともに、具体的な学習内容に即して「（製作にあたって）どこがうまくできたのか」「そこにはどんな工夫があるのか」「うまくいった理由は何か」などを問いかけていく。そして、子どもたちの内側にある混沌としたものを引き出し、言語化という整理作業によって事象や自分自身と向き合わせてやる必要がある。各教科等の学習過程で生み出され、未だ言語化されていないさまざまなものを言葉によって捉えさせ、表現させる過程は、思考や判断、表現といった諸力を使用し、鍛えて

いくことに深く関与している。

(2) 「発表し合う」：言葉によって分かち合う

「発表し合う」とは、まとめたものを互いに表出し、他者と分かち合っていく活動を指している。野菜の生産や流通についての調査体験も、昆虫の生態についてのまとめも、自分の中で静かに抱え込んだままにしておくのではなく、他者に提示し、分かち合っていく。こうしたプレゼンテーション活動は、校種や教科を問わず、すでによく実践されている。

優れた教師は、事前に説明順序や強調するポイントを書いたメモを用意させたり、提示する内容を簡単な文章にまとめさせたりという指導を行っている。国語科の学習内容と連動したそうした言語運用上の指導は、子どもたちの言葉の力を高めるうえで非常に有効である。さらに、ただ順序や強調ポイントをメモして終わるだけではなく、「なぜその説明順序なのか」「別の順序で説明した場合、表現効果に違いはあるか」「提示する具体例の数を変えてみると、説得力に変化が生じるか」「常体で語るのか、敬体にするのか」「冒頭に問題提起の言葉を含めるか、否か」といったような発表に関わる言語の問題を子どもたちに意識させ、その理由等も含めてクリティカルに考えさせていくことができると、言語活動の充実度は飛躍的に向上する。

また、家庭科、技術・家庭科、図画工作科、美術科等の授業においては、製作体験の集大成として、仕上げた作品を紹介し合うという展開も多い。このような場合、教室の後ろに展示して終わる^{注)}というのではなく、製作者との対話の機会をつくり出すとよい。作品を見せただけでは伝わりにくい魅力や実用性を

口頭で紹介したり、製作裏話のような関連情報を補ったりしながら、Show and tellによって作品を示し、必要に応じて質疑にも応じていく。こうした言語活動は、正確に説明する力だけでなく、即応する力、実物と言葉とを関連づける力をも高めていく経験となる。

以上のような「発表」活動は、毎回大々的に行う必要はない。理科の授業中に予想がまとまったら、隣の席の子にちょっと説明してみる。各自が見出したバスケットボールの作戦や練習方法を小グループの中で紹介しあってみる。こうした小さなプレゼンテーションのくり返しでも効果は高い。重要なのは発表会の規模ではなく、言語活用の意識を子ども一人ひとりに高めさせるということである。

「まとめ・発表」によって 思考や判断、表現等の力を鍛える

これからは「国語科ではないのだから」「作品の出来さえよければ」といった認識から一歩抜け出し、国語科以外の学習においても「まとめ・発表」の言語活動に向き合っていかなければならない。従来は言葉の学びと縁遠かった中学校や高等学校の国語科以外の教科担任は、とくに認識を改める必要がある。

充実した言語活動は、思考や判断、表現等の諸能力の使用を引き出し、それらを鍛えていく貴重な場となる。そして、こうした思考力や判断力等の向上は、各教科等の内容理解を助け、さらには生きる力の向上に結びついていくことはぜひ理解しておきたい。

《注》時間的な事情により口頭でのやりとりが難しい場合には、POPによる間接的な紹介・説明もおもしろい。POP (Point Of Purchase advertising の略語) とは、書店などで見かける小さな広告札のこと。書店員の推薦の言葉や小説の粗筋などが記されている。